

寄稿

老年学の父バトラー先生を悼む

井形昭弘

Akibiro Igata

名古屋学芸大学学長

世界の老年学の父といわれたロバート N. バトラー先生は2010年7月、83年間の偉大なる生涯を終えた。ここに先生の生前のご功績を称え、その逝去に心からなる哀悼の意を捧げたい。

先生はProductive Aging、エイジズムなどの概念を提案され、高齢者の鑑として自ら生涯現役を遂行された。つまり人類が初めて経験する高齢社会の創造にあたり先生は世界に向けて大きな指導力を発揮されており、老年学の父という尊称は当然であろう。

私は1993年には国立長寿医療研究センターの創設を仰せつかり、名古屋に赴任したが、その頃に二、三度お目にかかる機会を得たことを光栄に思っている。また博士が直接指導されていたマウント・サイナイ病院をお訪ねし、老年医学のメッカに感激したこともある。私は最近好んで「夢の高齢社会」という題で講演し、高齢者が社会にとって必要な存在であることを主張し

ているが、この基本姿勢は正に先生から学んだものである。

先生が提案された回想法は認知症予防に大きな効果を発揮しているため、恵那市にある日本大正村に明智回想法センターを創って頂き、また、厚生労働省の研究助成により回想法を福祉システムの一環に取り入れる努力に側面から協力している。

先生は世界に向けてILC活動を提唱しILC-Japanの創設にも尽力された。またわが国各地で講演され、シンポジウムなどにも参加、老年学の分野では誰もが知る存在であった。

今、先生のご逝去の報に接し、正に「巨星墜つ」との実感を味わっている。ここに偉大なる先生の死を悼み、先生の遺志を継いで、理想の高齢社会の創造に向けて努力を続ける決意を新たにしている。



1995年、日米専門家会議(大阪)での博士(左から2人目)と筆者(右端)